

五八 東北院の菩提講の聖の事¹ 「宇治拾遺物語卷四・六」

東北院の菩提講はじめける聖は、もとはいみじき悪人にて、人屋²に七度ぞ入りたりける。七たびといひけるたび、検非違使どもあつまりて、「これはいみじき悪人也。一二度人屋に居むだに、人としてはよかるべきことかは。ましていくそくばくの犯しをして、かく七度までは、あさましくゆゝしき事也。此のたびこれが足切りてん」とさだめて、足きりに率て行きて、切らんとする程に、いみじき相人³ありけり。それが物へ行きけるが、此足きらんとするものに寄りていふやう、「この人、おのれにゆるされよ。これは、かならず往生すべき相有る人なり」といひければ、「よしなき事いふ、ものもおぼえぬ相する御坊かな」といひて、たゞ切りに切らんとすれば、その切らんとする足のうへのぼりて、「この足のかはりに、わが足をきれ。往生すべき相あるもの、足切られては、いかでか見んや。おうおう」とをめきければ、切らんとする者ども、しあつかひて、検非違使に、「かうかうの事侍り」といひければ、やんごとなき相人のいふ事なれば、さすがに用ひずもなくて、別当に、「かゝる事なんある」と申しければ、「さらばゆるしてよ」とて、ゆるされにけり。そのとき、この盗人、心おこして法師になりて、いみじき聖になりて、この菩提講は始めたる也。相かなひて、いみじく終とりてこそ失せにけれ。

かゝれば、高名せんずる人は、其の相ありとも、おぼろけの相人の見ることにてもあらざりけり。はじめ置きたる講も、けふまで絶えぬは、まことにあはれなることなりかし。

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒沢大テキスト利用

2 人屋＝牢獄

3 検非違使、治安維持担当警察・裁判所にあたる

4 相人＝人相を見る占い師。現代よりははるかに信じられていたに違いない。

4 さつきと違って、ここで人相見が「やんごとなき」と評価されている。